

古墳の墳丘における横穴式石室の位置について

白石 太一郎

《目次》

はじめに

1. 受容期における横穴式石室の位置
2. 展開期前半における横穴式石室の位置
3. 展開期後半における横穴式石室の位置
4. 終末期における横穴式石室の位置

むすび

はじめに

日本列島で造営された古墳の埋葬施設には、縦穴式石室⁽¹⁾、粘土槨、木棺（石棺）直葬など墳頂部に上部から墓壙を掘り、その中に棺を取めてこれを保護する施設を設けた縦穴系のものと、墳丘内の墓室から墳丘外に至る通路を設けた横穴式石室、縦穴系横口式石室、横口式石槨、横穴など横穴系のもの二者がある。このうち後者の横穴系のもは、古墳時代の前期末葉ないし中期初頭以降になって朝鮮半島からの影響を受けて成立したものであり、日本列島の古墳では縦穴系のものが本来的な埋葬施設であった。しかし古墳時代後期になると、この横穴系の埋葬施設がそれまでの縦穴系のものに替わってむしろ主流となり、各地の支配者層の大型前方後円墳などにも採用されるようになる。

この横穴式石室をはじめとする横穴系の埋葬施設は、本来的には墳丘下の地下に営まれた斜めの墓道をもつ中国の墳丘墓の埋葬施設の影響が朝鮮半島を経由して及んだものにほかならない。本来日本列島の古墳は、弥生時代後期に顕著になる大型墳丘墓以来、小山のような墳丘の頂上部に縦穴系の埋葬施設を営んだものであり、日本の古墳を代表する前方後円墳の場合も、本来的には横穴系の埋葬施設にはなじまない形態のものともいえる。そうした中で、古墳時代中期以降、それまでの縦穴系の埋葬施設とはその埋葬原理・構造原理をまったく異にする横穴系の埋葬施設が、前方後円墳などの墳丘にどのようなかたちで取り入れられ、またその墳丘内における位置がどのように変化していったのかは、日本の古墳の構造それ自体の変遷過程をあとづけ、さらにその変化の意味と背景を考える上に看過できない重要な課題であろう。さらにいえば、それは中国や朝鮮半島の墳丘墓の影響を受けながらも独自の展開を遂げた日本の古墳と、中国や朝鮮半島の墳丘墓との根本的・本質的な相違が何処にあるのかを考えるうえにも、有効なヒントを与えてくれよう。

小論では、基本的に地域を後に畿内と呼ばれる近畿中央部に限り、また対象を墳丘における埋葬施設の位置とその変化を認識しやすい大型の古墳、すなわち後期段階では主として支配者層が営んだ前方後円墳に、終末期段階では大型の方墳・円墳などに限定して検討を試みることにしたい。また横穴系の埋葬施設にもさまざまな類型があるが、課題が分散するのを防ぐため、ここでは基本的には横穴式石室に絞って検討したい。なお小論での時期区分については、畿内地域にはじめて横穴式石室が受け入れられた5世紀を受容期、それが畿内支配者層の古墳の最も一般的な埋葬施設となる展開期を、その前半の6世紀前半から中葉までと後半の6世紀後半にわけ、さらに前方後円墳の造営が停止されて以降の7世紀を終末期として、その変化をあとづけてみることにしたい⁽²⁾。

1. 受容期における横穴式石室の位置

畿内における受容期の横穴式石室としては、大阪府堺市塔塚古墳、同藤井寺市藤の森古墳、同柏原市高井田山古墳などをあげることができる。このうち塔塚古墳は一辺約45mの比較的規模の大きな方墳で、3段

築成とされている。墳頂平坦部のほぼ中央に、長さ2.4m、幅2.2mの正方形に近い平面をもつ玄室の西側に長さ0.5m、幅0.9mの短い羨道を付けた両袖式の横穴式石室が営まれていた。石室の上半部はすでに失われていたが、玄室の壁は最下段には板石を横に立てて並べ、その上に割石を積み上げたもので、羨道は外部に向かって次第に高くなっていったという〔森・田中、1960〕。おそら九州の受容期の横穴式石室に近い形態の石室であったと想定される。さらにこの古墳では、墳頂平坦部の東南隅に近いところに横穴式石室と主軸の方向を同じくする木棺直葬の埋葬施設があり、位至三公鏡、方格八乳鏡や鉄剣、鉄刀などの副葬品が検出されている。

墳丘における石室の正確な立面的位置については明らかでないが、同じ九州系で肥後型の横穴式石室を持つ岡山市千足古墳例と同様に、墳丘の高い部分に営まれていたことは疑いない。墳丘が3段築成であったことが確実であれば、その3段目の墳丘中に造営されていたのであろう。またその羨道が外部へ行くにしたがって次第に高くなっていったとされるから、墳丘側面に開口するのではなく、傾斜をもつ墓道が墳頂部に通じていたのであろう。塔塚古墳の年代については、和泉IV期第2段階ないし第3段階の円筒埴輪が出土している〔十河、2008〕ことから、5世紀中葉を降るものではなかろう。

なお畿内の例ではないが、九州以東で最古の本格的な横穴式石室をもつ古墳に岡山市千足古墳がある。径56mの円丘に長さ23mほどの短い前方部（張出し部）を付けた帆立貝式の前方後円墳で、円丘部は塔塚古墳と同じように3段築成である〔梅原、1938a〕。横穴式石室は、墳頂平坦部の中央よりやや西よりに玄室を配した肥後型のもので、前方部とは反対の南南東方向に羨道部を向けている。梅原末治氏は「実測図に依って墳丘に於ける其の立面上の位置を推すと、大体に於いて第1段上に室の底面がある」とされる。ただ報告書の墳丘断面図（図1）をみると、石室底面は前方部上の平坦面とほぼ同じ高さの後円丘第1段上のテラスよりは明らかに高く、第2段上に位置するものとみてよいようである。

このことから千足古墳の横穴式石室は、3段築成の後円部の第2段上面ないしこれよりやや低いところとその基底を置き、基本的には第3段中に営まれていたものと判断できる。塔塚古墳の場合もほぼこれと同様であったと考えてよかろう。また千足古墳の場合も円丘部の第3段南側の墳丘側面まで羨道ないし墓道が延びていたとは考え難いから、塔塚古墳の場合と同じように羨道部に続く斜めの墓道が墳頂部に通じていたものと思われる。さらにこの千足古墳でも横穴式石室の羨道ないし墓道部の上方に、石室の主軸と直交する方向に軸をおく粘土槨と推定される埋葬施設が営まれていたことが注目される。おそらくその位置からも、石室への埋葬が終り、墓道が埋められた後に営まれたものであろう。粘土槨には変形五獣形鏡のほか甲冑、巴形銅器など石室の副葬品に劣らない遺物を副葬していたことが注意される。なお、古墳の造営時期が5世紀前半にさかのぼることは疑いなかろう。

千足古墳や塔塚古墳の横穴式石室が肥後型ないし九州系の両袖式の石室であったのに対し、藤の森古墳や高井田山古墳例はともに入口部からみて左側に袖部をもつ左片袖式⁽³⁾で、石室構造が前2者とはまったく異なる。藤の森古墳例の位置づけには問題がのこるが、少なくとも高井田山古墳例が後の畿内型横穴式石室の祖形と関連するもの

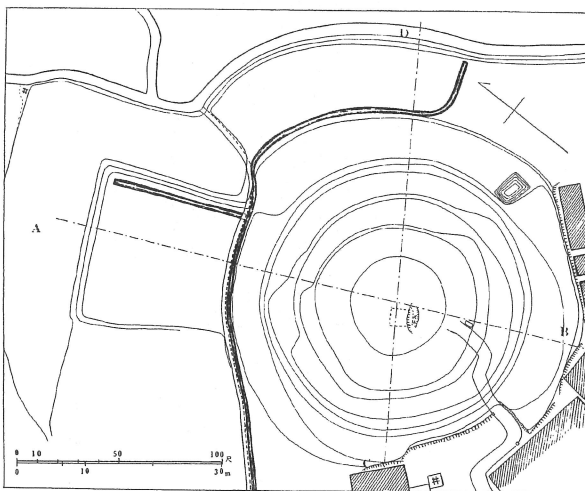


図1 岡山市千足古墳墳丘測量図
（『近畿地方古墳墓の調査』3による）

であることは疑いなかろう。藤の森古墳は径24メートル、高さ3.2メートルの円墳で、その造営時期は円筒埴輪の編年では第IV期で大仙陵古墳（仁徳陵）と市の山古墳（允恭陵）の間に位置づけられるというから〔一瀬、2008〕、5世紀の前半から中葉にかけての古墳であろう。平面的には横穴式石室の玄室の位置がほぼ墳丘の中心部にくることは報告書の外形実測図から明らかである。一方その立面的位置については、「封土は、内径24メートルの円形の内側に、高さ約3.2メートルの盛土を行ったものである。高さ約0.3メートルまで盛土すると、次に中央から北寄りにかけて粘土層をおき、その上に板状片岩からなる横穴式石室を築いていた。（中略）石室と墳丘の築成は交互に行われており、その様子が墳丘断面にもよく現れていた」と報告されている。これによると、盛土によって造成された低い基盤の上に、石室の壁を積み上げながら墳丘を形成していったものと想定される。墳丘の基底近くに床面を置いていたことになるが、これは直径24メートルほどの小規模な古墳の故であろう。石室前庭部の状況については記述がなく不明であるが、「閉塞石の南側にも、順次土を盛っており、叩きしめたものかその土が固くしまった状況を認めた」という〔西谷、1965、野上、1967〕。

一方の高井田山古墳例は、封土の流失が著しく本来の墳丘の形状はよくわからない。北側に短い突出部をもった帆立貝式の前方向後円墳の可能性が大きいが、一応径22メートル程度の円墳として報告されている〔安村・桑野、1996〕。前方後円墳とすれば、千足古墳の場合と同様に横穴式石室は前方部とは反対の方向を向くことになる。墳丘における段築の状況などについては不明なところが多い。石室の位置については、報告書の墳丘測量図（図2）によれば平面的には円丘のほぼ中央に玄室を配し、立面的には墳丘の頂上部近くに営まれていたことは疑いない。横穴式石室自体もその上半部を失っているが、本来石室の下半部は墳丘に穿たれた墓壇内に営まれ、上半部は盛土と並行して築かれたものと考えられている。羨道部の床面は前方に進むとともに少しずつ高くなっているようであるが、墳丘がそれほど大きくないので特に斜めの墓道を設けなくても墳丘の側面に達していたものと思われる。

このように、畿内地域で5世紀段階に横穴式石室を受け入れた古墳は、塔塚古墳例など九州系のもも、また高井田山古墳例などおそらく百濟など朝鮮半島からの直接の影響によって成立したと考えられるものも、石室は共に平面的には墳丘のほぼ中心部に玄室を置き、立面的には墳丘頂部近くに営まれた。塔塚古墳のように墳丘規模の比較的大きいものでは、羨道やその前の墓道の床面が外部に向かって次第に高くなって墳頂平坦面に達していたものと思われる。これは明らかにそれ以前の竪穴式石室など竪穴系の埋葬施設の墳丘における位置のあり方を踏襲したものにほかならない。

この点は北部九州の初期横穴式石室の場合とも共通するが、九州では福岡市鋤崎古墳例にみられるようにこの段階から複数の被葬者のおそらく追葬にともなう合葬が行われているのに対し、畿内の塔塚古墳例や吉備の千足古墳例など5世紀でも中葉以前のもので、九州系の石室を受容したものでは、ともに石室外に粘土槨ないし木棺直葬による追葬が行われている。また本来の肥後型石室では、玄室内に石障や仕切石などを用いて複数の遺骸収納区画を設えていたの

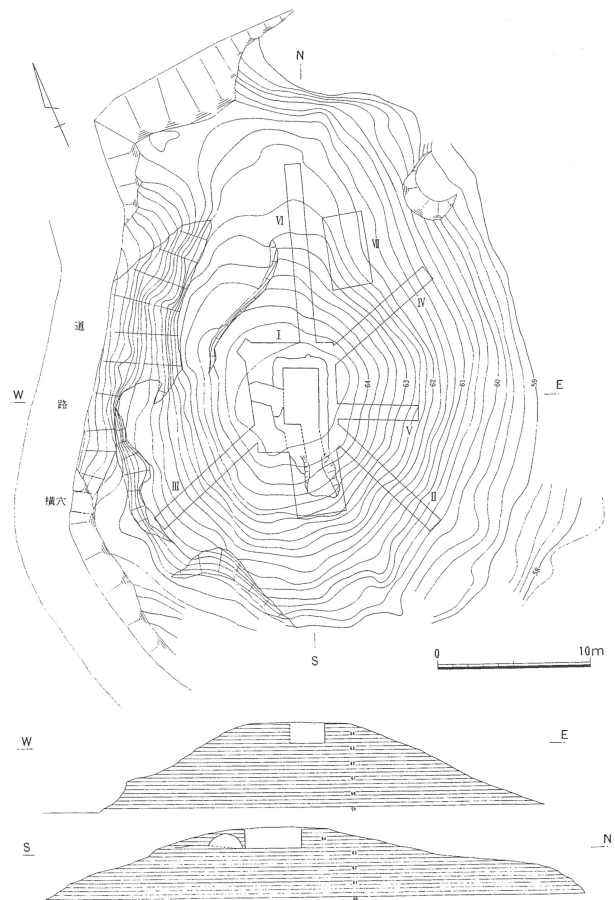


図2 大阪府柏原市高井田山古墳墳丘測量図
（『高井田山古墳』による）

に対し、それを受入れた千足古墳では玄室内には奥壁側に一施設がみられるだけで、石室では追葬が行われなかった可能性が大きい。横穴式石室の最も重要な機能を役立てていなかったということになる。ただ5世紀後半の、後の畿内型石室につながる高井田山古墳例の場合は、調査者も時期を異にする合葬を想定しておられるように、この段階には追葬が可能な横穴式石室の構造的特質が生かされるようになったらしい。追葬の問題はともかく、5世紀段階の畿内の古墳に横穴式石室が採用された例では、石室はいずれも平面的には墳丘の中央部に、立面的には墳頂部に近いところに配置されている。従来の堅穴系埋葬施設の場合と同じ意識で横穴式石室の位置が決定されていることが注目されよう。

2. 展開期前半における横穴式石室の位置

畿内では5世紀段階の首長墓クラスの前方後円墳で横穴式石室を採用した例は、現時点では確認されていない。ところが6世紀に入ると前方後円墳で横穴式石室を採用する例が多くなる。それらの中でも早い段階のものとして奈良県高取町の市尾墓山古墳例がある。前方部を西北方に配し、周囲に空堀の周濠と外堤をめぐらした墳丘長66[㍉]の2段階成の前方後円墳で、その後円部のほぼ中央に玄室奥壁の位置を置き、西南側の後円部側面に羨道に向けた横穴式石室が営まれている〔河上、1984〕。またこの古墳の横穴式石室で注目されるのは、玄室奥壁の向かって右寄り、床面より80[㍉]ほど上部から石室の後方にも羨道状の通路が設けられ、その役割を果たした後に奥壁が完成されていることである。調査者は石棺の蓋の搬入のための施設と考へておられるが、石棺の搬入ないし納置に関わる施設であることは確かであろう⁽⁴⁾。この石室内には玉類、馬具、鉄刀、鉄鏃などとともに土師器・須恵器が遺存していたが、須恵器はMT15型式の中ではやや新しい要素がみられるもののその範疇に含まれるものと判断され、6世紀の第1四半期に遡るものと考えて差し支えなからう⁽⁵⁾。

墳丘内における横穴式石室の平面的位置については先述のように後円部のほぼ中心点近くに玄室の奥壁を置いている。墳丘の主軸上ではやや前方部より偏ってはいるものの、その後の前方後円墳をはじめとする比較的大規模な墳丘をもつ古墳に横穴式石室が採用される際の平面的位置の原則がすでに成立していることが注意される。一方立面的な位置については、報告者も「立面からみれば石室（墳丘か）の段築面よりやや下に石室の床を置いているものの、全体的にみれば、2段目の墳丘中に石室を築いているということが出来る」とされる〔河上、1984〕。確かに図3の上図に示すように墳丘の第1段上面よりやや低いところに玄室の床面がくる。ただ宮原晋一氏が指摘されたように、この石室の羨道部の床面は玄門の^{まぐさ}楯石下の位置に段を設け、玄室床面より60[㍉]ほど高くしていたと思われる〔宮原、1988〕。したがって羨道とそれに続く墓道の床面はほぼ墳丘第1段上面のテラスに接続していたものと判断して大過なからう。墓道の存在も宮原氏が明確に指摘されている通りであろう。

さらにこの古墳の横穴式石室の構築法で注目されるのは、その床面下からさらに側壁下にかけて平均20～30[㍉]大の割石を少なくとも2段以上積み重ねた基礎地形^{ちぎょう}の存在が確認されていることである。こうした横穴式石室の基礎地形は、後述するように大阪府高槻市今城塚古墳、京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳などでも知られており、横穴式石室を墳丘の高い部分の盛り土中に営むこの時期の大型の前方後円墳などでは欠かさない工法であったと思われる。市尾墓山古墳の場合は、報告書では第1段は大半が地山削りだしで、第2段が盛り土で構築されたものとされているが、現存する外堤の最高部の標高94[㍉]くらいまではともかく、後円部の標高96[㍉]前後の高さをもつ第1段のほとんどが地山削りだしとは考えがたい。地点による差異もあろうが、第1段の上半部については大部分盛り土によったのではなからうか。盛り土中にこのような大型の石室を構築するために、こうした基盤工が施工されたものと考えられる。

大阪府東大阪市の芝山古墳は墳丘長26[㍉]のきわめて小規模な前方後円墳であるが、明治初期に英国人ウイリアム・ゴランドが発掘調査を実施し、古式の横穴式石室の存在が知られていたもので、第二次大戦後森浩一氏らが再調査を実施された。径17[㍉]ほどの後円部に低平な前方部をつけたものである。造営時期はMT15期でも新しい段階のものである〔大塚、1977〕。横穴式石室は正方形に近い平面をもつ両袖式で、持送

りの著しい四壁と高い天井をもつ。玄門の両側には板石を立てて用いており、九州の横穴式石室の影響を受けたものであることは疑いない。あまり長くない羨道はその入口を外部から塊石を積み上げて閉塞されていたことが森氏らの調査により明らかにされている〔森、1978〕。報告書が未刊で墳丘との関係は正確にはわからないが、おそらく羨道外に低い前方部頂に至る斜めの墓道があり、埋め込まれていたであろう。福岡市鋤崎古墳例など北部九州の初期横穴式石室の例と共通するものである。

京都府向日市の物集女車塚古墳は、墳丘長約45mの前方部を北東に向けた2段築成の前方後円墳で、後円部には墳丘主軸と直交して東南方に開口する左片袖式の横穴式石室がある。金銅製冠を含む装身具、武器、馬具などと共に出土した多量の須恵器からその造営年代は、MT85型式時、すなわち6世紀中葉すぎと想定される。墳丘内における横穴式石室の位置について

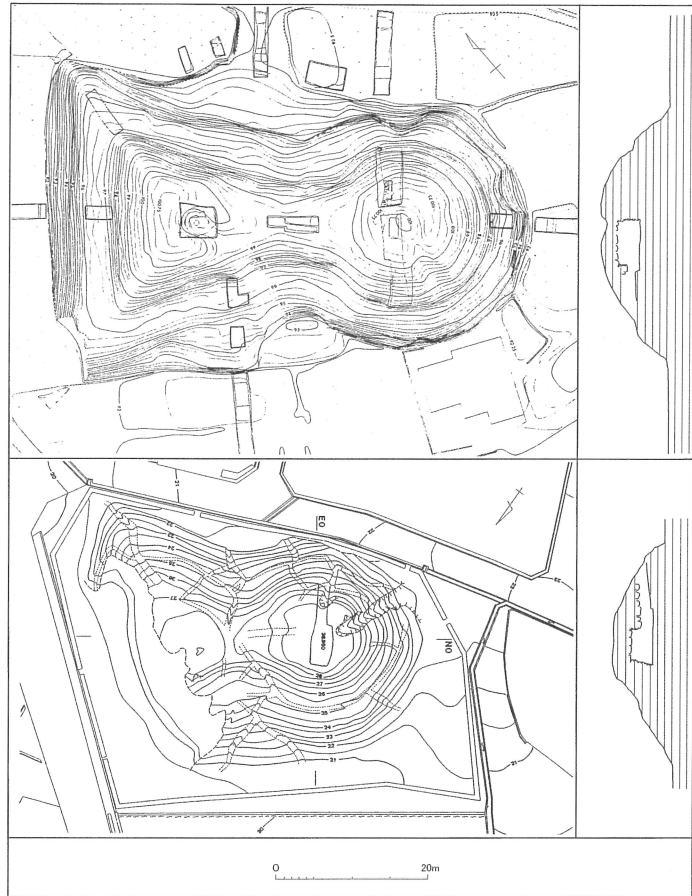


図3 6世紀前半～中葉の前方後円墳における横穴式石室の位置（上：奈良県高取町市尾墓山古墳、下：京都府向日市物集女車塚古墳）

は、平面的には後円部のほぼ中央に玄室を置き、立面的には玄室の床面は標高25m付近にある第1段上面のテラスより約1mも低い。ただ羨道の床面は玄門より2.4mほど前方の柵石を境に20%ほど段差がついて前方が高くなり、それより前方の床面はゆるやかな傾斜で次第に高くなっている〔秋山・中山編、1988〕。おそらく羨道につづく墓道はそれほどの段差もなく墳丘第1段のテラス面に接続していたのではなかろうか（図3下）。

報告書では、横穴式石室奥壁背後にあたる後円部北側斜面で確認された基盤層と玄室内で確認された基盤層とでは1.4mの比高差があり、石室の下半部がこの基盤層を掘り込んだ掘り方内に営まれたことは確実にされている。したがって市尾墓山古墳で検出されているような石室の基盤工は認められていない。この古墳の石室の床面が第1段のテラス面より相当低いレベルに設定されているのも、石室下半部を基盤層に穿たれた掘り方内に納めるためであったと思われる。

宇治市五ヶ庄二子塚古墳は、周濠部出土の須恵器などから6世紀前半のものと想定される墳丘長112mの前方後円墳であるが、すでに後円部は破壊されそこにあつた横穴式石室は失われていた。ただこの古墳では、盛り土中に掘られた大きな掘り方内に礫を詰め込んだ石室の基礎地形が発掘調査によりみつまっている〔杉本・荒川・福島、1992〕。ここでも盛り土中に石室の基底が来る場合には、石材を詰めた基礎地形が必要と考えられたことを示している。

兵庫県川西市勝福寺古墳は、墳丘長41mの前方部を南南東に配した前方後円墳であるが、墳丘の流失などにより本来の形状は必ずしも明確にできない。後円部の北側で検出されている地山を整形し、埴輪を並べた「中位平坦面」を第1段の上面と判断してよければ、少なくとも後円部については2段築成で、第2段は盛り土によって構築されているらしい。中心的な埋葬施設である後円部の第1石室は、平面的には玄室を後

円部のほぼ中央に置き、立面的には玄室の床面を第1段の上面よりやや低いところに置いている。この石室も羨道部に「段状施設」を設けるとともに、羨道の床面は外部へ向かって次第に高くなるよう緩やかに傾斜している。石室の基底を地山に掘り込んだ掘り方内に置くために、羨道床面に傾斜と段差をつけて第1段のテラスに達するようにしているのであろう。基本的に墳丘と石室の関係は物集女車塚古墳の場合と同様と判断してよかろう。第1石室の時期はTK10型式時で、6世紀の第2四半期頃であろう。なおこの古墳には、さらに後円部の第1石室の前方に小型の第2石室が、また前方部にも木棺直葬の複数の埋葬施設があるが、ここではふれない〔福永・寺前編、2007〕。

奈良県天理市東乗鞍古墳は、西に前方部を配した墳丘長約80mの前方後円墳で、後円部に左片袖式の横穴式石室が南向き開口している。玄室内には奥に阿蘇の溶結凝灰岩製の古式家形石棺が、前方には凝灰岩製の組合式石棺があり、おそらくMT15型式時の新しい段階ないしTK10型式時の造営になるものであろう。末永雅雄氏の『日本の古墳』所収の墳丘測量図によると、石室の平面的な位置は後円部の中心よりやや前方部よりあり、玄室の奥壁の位置も墳丘中軸線よりやや後ろの北側に寄っているようにみられる〔末永、1961〕。測量図からは墳丘の段築の状況については必ずしも明確にしがたいが、現地での観察によれば、3段築成の可能性も少なくないと思われる。その場合、第1段と第2段の高さはそれぞれ3.5m程度、第3段は7m程度と観察され、第1段の造成は後円部の背後の東側では省略されていることになる。石室の立面的な位置は、墳丘が3段築成とすれば石室の床面は第2段の上面に、2段築成とすれば、第2段中に位置することになる。いずれにしても、市尾墓山古墳と同じ様に石室が墳丘のきわめて高い位置に営まれていることは疑いない。

横穴式石室それ自体は遺存していなかったが、TK10型式時の大阪府高槻市今城塚古墳(墳丘長190m)では、3段築成の後円部に存在したと想定される石室の基盤工、すなわち基礎地形の石組みが、文禄5年(1596)の大地震で大きく崩れた後円部の北側部分にそのまま落ちている状況が確認されている〔高槻市教育委員会、2007〕。この時期としては最大級の大型前方後円墳であるが、調査者が想定されているように少なくとも後円部は3段築成であり、中心的な埋葬施設である横穴式石室は基本的には3段目の墳丘中に営まれていたことは疑いなかろう。

大阪府高石市の富木車塚古墳もまたTK10型式期の墳丘長48mの、北西方向に向けた低平な前方部をもつ前方後円墳で、後円部に横穴式石室があり、さらに後円部から前方部にかけて5ヵ所の木棺直葬の埋葬施設が検出されている。横穴式石室は、袖部をもたない細長い平面をもつ特異な形態のもので、後円部の中央より前方部側からみて後ろに偏った位置に南向きに営まれている。墳丘の段築の有無については明らかにされていないが、おそらく後円部については、低平な前方部頂部の平坦面とほぼ同じ高さの第1段の上に第2段が形成されていたものと思われる。この場合後円部石室の床面は想定される第1段のテラス面よりは少し低い位置に設定されていたことになる。この石室は、明らかに地山上に盛られた粘質土層中に掘り込まれた掘り方中にその下半部が構築されており、石室の基底は墳丘の基底部より2mほど高い位置にある〔上田・森・北野・秋山・宇田川、1960〕。石室床面は全体に入口の方へ緩やかに高くなっているから、おそらく第1段のテラスに接続していたものと思われる。

京都市右京区太秦の天塚古墳は、蛇塚古墳、垂箕山古墳(仲野親王墓)などとともに太秦古墳群を構成する、前方部を南南東に向けた墳丘長73mの前方後円墳である。この古墳から出土した須恵器の器台と壺が京都大学博物館に所蔵されているが、ともにTK10型式で6世紀の第2四半期の古墳と想定できる。後円部に2基の横穴式石室があり、後円部のほぼ中央に奥壁を置く無袖式の石室(北石室)はほぼ西方に開口し、後円部でもより西側のくびれ部より営まれた前者よりやや小規模な右片袖式の石室(南石室)は南西方向、まさにくびれ部の方に開口している。京都大学考古学研究会の人たちが作成された測量図によると、墳丘は明らかに2段築成で、基底は標高29m、後円部よりやや高い前方部頂は標高37.5mほどで、ほぼ標高32m付近に第1段上面のテラスが認められる。墳丘第1段が約3m、第2段が約5.5mの高さを持っていたことが知られる。北石室、南石室ともその基底はほぼ標高32mであるから、ともに約3mの高さをもつ第1段

の段上に営まれたものであることが知られる。石室床面が第1段のテラスにつながっていることは疑いなかろう〔京都大学考古学研究会、1971〕。

大阪府羽曳野市の峯ヶ塚古墳は墳丘長96mの前方後円墳で、古市古墳群中の後期の大型前方後円墳で、唯一中心的埋葬施設の発掘調査が実施されている貴重な例である〔羽曳野市教育委員会、2002〕。後円部の頂上部で石室が検出されているが、全掘されていないために竪穴式石室・横穴式石室のいずれであるかが判明していない。報告書では竪穴式石室の可能性が大きいことが指摘されている〔吉澤則男、2002〕が、ただ長さ3.4m、幅2.2m、想定される高さが1.8～1.9mという石室の形状はこの時期の竪穴式石室としては類例がなく、考え難い。報告者が類似例として挙げておられる兵庫県姫路市宮山古墳第1石室は、長さ4.7m、幅1.8m、福井県敦賀市向出山1号墳の第1石室は長さ4.3m、幅1.8～2m、高さ1.3mで、いずれも峯ヶ塚例に比べて平面形が長細く、また高さも低い。さらに横穴式石室を考えた場合、想定しうる羨道床面の幅が1.3m未満、天井の高さが1.9m未満で、発見されている石材片から存在が考えられる阿蘇の溶結凝灰岩製の刳抜式家形石棺の搬入ができないことを指摘されるが、横穴式石室で石棺先置と想定しうるものは少なくない。さらに想定される玄門部の位置から墳丘斜面まで9mの羨道が必要となることを指摘しておられるが、畿内でも初期の横穴式石室では羨道や墓道の床面が前方に向かって高くなって墳頂平坦面に至るもので、墓道を埋めてしまっていると想定される例は先述したとおりに決して少なくない。

残念ながら決め手になる部分が未掘で確定することはできないが、筆者は本例が横穴式石室であることはほぼ間違いないと考えている。この想定が正しければ、峯ヶ塚古墳も前期以来の竪穴系埋葬施設と同じように墳頂部に横穴式石室を営んだ例に数えることができよう。その場合は、玄室を後円部のほぼ中央に置き、羨道を前方部の方向とは反対の方向に向けていたことになるが、高井田山古墳例がそれに当たるらしく、吉備では千足古墳の例があることはすでに述べた。峯ヶ塚古墳は須恵器やその他の副葬遺物からもMT15型式時のものと想定されるが、石室がまだ小規模なためMT15型式時でも新しい市尾墓山古墳例のように比較的大きな石材を用いたものではない。しかしそれでも石室石材の下には基礎として拳大の石材が1～2石の厚さで石室の外側約1mの範囲まで敷き詰められ、基礎地形とされていた。さらに石室内にも同様の礫が側壁の2段目まで詰められ、基礎地形とあわせて45～50cmの厚さになるという。発掘調査の結果では、この石室の構築のための掘り方は営まれていなかったことが確認されている。後円部頂上部の築成と並行して石室の造営がなされたことは明らかである。このこと自体も、峯ヶ塚古墳の埋葬施設が、墳頂部から穿たれた墓壇内に埋葬を行う前期以来の伝統的な竪穴系埋葬施設ではなかったことを強く示唆するものであろう。

古市古墳群では5世紀末葉の岡ミサンザイ古墳（仲哀天皇陵）に続いてボケ山古墳（仁賢天皇陵）、白髪山古墳（清寧天皇陵）、高屋城山古墳（安閑天皇陵）など6世紀初頭から中葉頃の、この時期としては比較的大規模な前方後円墳が続いて造営されるが、その埋葬施設の実態についてはまったく知られていない。6世紀の第1四半期の市尾墓山古墳にみられるように、6世紀になると畿内の有力首長層も横穴式石室を採用したことが知られており、古市古墳群のこれらの大型前方後円墳でも横穴式石室が採用されていた蓋然性はきわめて高いと思われる。その実態を推測する上にも峯ヶ塚古墳の石室のあり方が示唆するところはきわめて大きいといえよう。

また奈良県橿原市鳥屋ミサンザイ古墳（宣化天皇陵）も、宮内庁書陵部による調査により周濠部から検出された埴輪や須恵器などから6世紀前半ないし中葉前後の前方後円墳であることが知られている〔笠野、1990〕。墳丘長は約140mで、この時期としては最大級の前方後円墳である。墳丘は陵墓地形図によると高さ約6～7mの比較的高い第1段の上に、後円部で約9m、前方部で約10mの高さの第2段を載せている。比較的低い第1段と第2段の上に高い第3段を載せた中期型の大型前方後円墳とはまったく異なる側面観を呈している。これはさきにふれた市尾墓山古墳の墳丘形態とも共通するものであり、鳥屋ミサンザイ古墳の場合も市尾墓山古墳の場合と同じように、比較的高い第1段上に横穴式石室を営んでいるものと推測することができるのではなかろうか。

なお同様な想定は、さきにふれた古市古墳群のボケ山古墳や白髪山古墳についても可能であろう。ボケ山

古墳は墳丘長約 122 ㍎の前方後円墳であるが、後円部が径 65 ㍎、高さが約 11 ㍎であるのに対し、前方部は幅が 108 ㍎、高さが約 13 ㍎で、前方部が後円部より高く、また前方部の先端が極端に開いた平面形を持つ前方後円墳として知られている。陵墓地形図によると墳丘は明らかに 2 段築成で、後円部では第 1 段は約 4 ㍎、第 2 段は約 7.5 ㍎の高さを測ることができる。鳥屋ミサンザイ古墳ほどではないが、やはり 2 段築成でその第 1 段が高いことが注意される〔宮内庁書陵部陵墓課編、1999〕。一方の白髪山古墳は墳丘長 115 ㍎で、後円部が径 63 ㍎、高さが約 10 ㍎であるのに対し、前方部は幅が 128 ㍎、高さが約 11 ㍎で、ボケ山古墳の場合よりさらに前方部先端の開き方が著しくなっている。この古墳も明らかに 2 段築成であり、後円部で見ると第 1 段の高さが約 4 ㍎、第 2 段の高さが 6 ㍎ほどで、やはり第 1 段が比較的高い〔宮内庁書陵部陵墓課編、1999〕。ともに後円部の第 1 段上に横穴式石室が営まれている可能性を考慮することができるのではなかろうか。同じ古市古墳群にある高屋城山古墳については、中世の高屋城に取り込まれていたためか墳丘の改変が著しいようで、こうした検討は困難である。なお最近の古市古墳群における円筒埴輪の編年研究では、円筒埴輪の型式からはボケ山古墳の方が白髪山古墳よりも古く、ボケ山古墳は峯ヶ塚古墳とほぼ平行する時期のものと考えられている〔一瀬・十河・河内、2008〕。

以上、畿内の大規模な前方後円墳に横穴式石室が採用されるようになる 6 世紀前半から中葉の古墳の墳丘における横穴式石室の位置の問題について検討した。この段階ではまだ墳丘の頂上部に埋葬施設を営むという前期古墳以来の意識が強く残っていて、中型の前方後円墳では石室を 2 段築成の墳丘の第 2 段中に営み、その基底を第 1 段上、ないしそれよりやや低い位置に置いた例が多い。また大型で 3 段築成の今城塚古墳などでは、第 3 段中に石室が営まれたらしい。それぞれの古墳の占地状況により異なるが、地山の基盤に掘り込まれた掘り方内に石室の基底を置けない場合には、盛り土中に石積みの基礎地形を営む場合が多かったようである。石室の基底が第 1 段の上面より低いところに設定された場合には、羨道に段差を設けたり、羨道や墓道の床面を前方へ次第に高くなるよう傾斜させて第 1 段のテラスに接続させていたようである。

一方横穴式石室の平面的な位置については、受容期の 5 世紀代には玄室を前方後円墳の後円部など墳丘の中央に置くものが多かったが、大型の前方後円墳にも横穴式石室が採用されるようになったこの段階には、石室の羨門部を墳丘端の斜面に近づけるためであろうか、玄室の奥壁の位置を後円部など墳丘の中心に置く例が出現していることが注目される。6 世紀前半の段階では小型の前方後円墳などでは玄室を墳丘の中央に置く例が多いが、6 世紀後半の段階になると玄室奥壁の位置を墳丘の中心に置くという原則が確立することになるのである。これは、古墳の中心的な埋葬施設を墳頂部の中央に営むという前期以来の原則と、墓室から外部に至る通路は墳丘外にまで達するものでなければ意味がない横穴式石室の構造的性質との間の矛盾点を調和させるための一つの解決法にほかならなかつたと思われる。

なお、6 世紀前半でも第 2 四半期には今城塚古墳など大王墓級の大型前方後円墳にも横穴式石室が採用されたことが知られるが、その第 1 四半期にも古市古墳群などの大王墓には横穴式石室が取り入れられていたと考えるべきであろう。畿内の有力豪族層が横穴式石室を採用しているにもかかわらず、大王だけがこれを受け入れていなかったとは考え難いからである。

3. 展開期後半における横穴式石室の位置

前節では、畿内の大規模な前方後円墳に横穴式石室が採用されるようになる 6 世紀前半から中葉の古墳における横穴式石室の位置について検討した。次にこれに続く後期後半の 6 世紀後半のあり方をみてみることにしよう。結論的にいうと、それまで墳丘の上段中あるいは第 1 段上など比較的高い位置に営まれていた横穴式石室が、基本的には墳丘の基底部に営まれるようになるのがこの時期の大きな特徴である。

6 世紀後半でも早い時期の前方後円墳として奈良県葛城市二塚古墳がある。この古墳は葛城山東麓に営まれた墳丘長 60 ㍎の前方後円墳で、その前方部を南側に向ける。後円部の南から東側ではよくわからないが、墳丘の西側から北側の前方部では明らかに第 1 段のテラスがめぐって、2 段に構築された前方後円墳であることがわかる。後円部、前方部、西側の造出し部の 3 ヲ所に横穴式石室が営まれている〔上田・北野・

伊達・森、1962]。

このうち最も大規模で、この古墳の中心的埋葬施設と考えられる後円部石室は両袖式で、後円部の前方部側からみて背後の南向きに開口する。その平面的な位置については、玄室奥壁の位置を後円部のほぼ中央に置き、立面的にはその床面をほぼ墳丘の基底面に置いている(図4)。前方部の石室は後円部のそれに比べるとはるかに小規模なもので、左片袖式である。前方部の第2段の西側斜面に営まれ、南西方向に向かってくびれ部に開口する。立面的にはその床面を墳丘第1段の上面によりやや低いところに置いているらしい。またくびれ部の石室は平面的には袖部をもたず、玄室床面より90°上

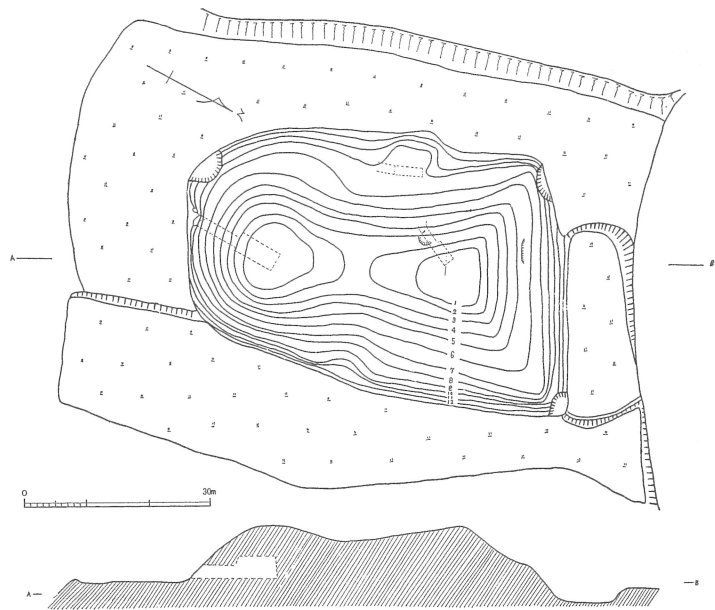


図4 奈良県葛城市二塚古墳墳丘測量図(『大和二塚古墳』による)

に羨道床面を設えた特異な構造のものである。報告書によるとその玄室床面の高さは後円部石室のそれとほとんど同じというから、やはり墳丘基底面に営まれたものであることが知られる。ただ羨道の床面は1m近くも高くなっており、羨道には天井石は本来なかったと想定されていて、開口部がどのようになっていたのかは不明である。

ほぼ第1段上に営まれた前方部石室を別にすると、後円部石室も造出し部石室もその床面の高さを墳丘の基底面にそろえており、前節でみた6世紀前半の諸例とはまったく違っていることが注意されよう。なお、後円部と前方部の石室からは土器の小片が出土したに過ぎないが、造出し部石室からは多量の須恵器が出土している。その中には一部7世紀に降る時期のものも含まれているが大半はMT85型式からTK43型式のものである。特に数量の多い有蓋高杯については、脚部がまだ比較的短く、上段に長方形の透かしと裾部に三角形の透かしをもつもの、あるいは下段の透かしがまだ短い長方形のものが圧倒的に多く、この古墳の初葬時、すなわち造営時期がMT85型式時に遡ることは明らかであろう。おそらく6世紀の第3四半期のものと思われる。

二塚古墳と同じようにMT85型式時の前方後円墳で、墳丘基底部にその基底を置いて営まれた横穴式石室をもつものとして奈良県高取町宮塚古墳がある。この古墳は市尾墓山古墳とともに市尾古墳群を形成するもので、市尾墓山古墳の次の世代の首長墓であろう。墳丘長は47mほどで、前方部は北北東面する。後円部には、北北西方向を向き、やや長い平面の玄室をもつ両袖式の横穴式石室があり、後円部の墳丘側面に開口している。玄室の奥よりのところには、二上山の凝灰岩製の剝拔式家形石棺が置かれている。石室は前代の市尾墓山古墳例と同じように、羨道の中央よりやや奥のところに入側を一段高くした段があり、その上に閉塞石が置かれていたという。横穴式石室の位置は平面的にはほぼ後円部の中央に玄室を配しているようであり、立面についても、前方部側の北東方向へ下がる傾斜地に営まれているため墳丘の基底をどこに求めるか難しいが、石室の開口する後円部の北西側で観察すると、ほぼ墳丘基底部に石室の床面を置いているものと判断してよからう。出土した須恵器はMT85型式のもので、玄室内の家形石棺の型式もこれと矛盾しない〔木場、2001、高取町教育委員会、2004〕。

MT85型式に続くTK43型式の須恵器を出す前方後円墳で横穴式石室をもつものは少なくない。ただ発掘調査ないし測量調査の報告があつて石室の墳丘における位置を正確に把握できるものはそれほど多くはない。奈良県葛城市の平林古墳は、葛城山東麓の西方から北東方向へ伸びる尾根の先端部を利用して営まれた、前

方を南西方向に向けた墳丘長 62 ㍎の前方後円墳である〔坂、1994〕。墳丘は基本的には 2 段に築成されているようであるが、丘陵の高方を切断して形成された前方部では第 1 段は省略、ないし掘り切り部の底部を第 1 段のテラスに接続させていたのであろう。横穴式石室は、図 5 にみられるように平面的には玄室を後円部の中央に配するとともに、立面的には墳丘の基底部とその床面の高さを同じにしている。石室内から出土した須恵器は TK43 型式で、6 世紀の第 4 四半期と考えてよからう。

奈良県平群町烏土塚古墳もまた墳丘長約 60 ㍎の、前方部を北に向けた前方後円墳で、その後円部に南向きの横穴式石室がある。報告書によると後円部の西側のトレンチでは墳頂部から 3 ㍎ほど低いところで平坦面が、さらに 7 ㍎ほど低いところで墳丘を画する溝が検出されている〔伊達・岡・菅谷、1972〕ので、本来は 2 段に構築されていた可能性が大きい。横穴式石室の位置は、平面的には玄室の奥壁の位置を後円部のほぼ中央に置き、立面的には墳丘の基底部に石室の床面を置いているものと判断される。

このほか奈良県桜井市珠城山 3 号墳もまた東側に前方部を配した墳丘長 48 ㍎の前方後円墳であり、後円部と前方部にそれぞれ南に開口する横穴式石室が営まれている。平面的には後円部の石室は、玄室奥壁をほぼ後円部の中央に置いていたようであるが、より小型の前方部石室は奥壁の位置も墳丘の中軸線にまでは達せず、石室全体が前方部の南斜面下に位置する。立面的には、調査を担当された伊達宗泰氏は後円部、前方部いずれの石室も「墳丘の基底面と推測される部分に」構築されていることを明記しておられる〔伊達、1960〕。墳丘の段築の状況は不明であるが、二つの横穴式石室がともに墳丘基底部に石室の床面を置いていたことは疑いなかろう。

京都市右京区太秦の蛇塚古墳は、第 2 節でふれた天塚古墳とともに太秦古墳群を構成する前方後円墳で、すでに早くから墳丘を失って巨大な横穴式石室が露出し、「山城の石舞台」といわれてきた。この古墳が本来墳丘長 75 ㍎ほどの南西方向に前方部を配した前方後円墳であったことは、周囲の地形から知られていた〔梅原、1938c〕。さらに京都市の古い都市計画図によれば、周りに周濠と外堤をめぐらしていたことが判るといふ〔平良・久保・奥村、1986〕。墳丘の立面形は不明であるが、かつては周囲より一段高い畑地の中央に石室の石組みが残されていて、石室の基底が浅い濠の底部よりやや高い墳丘の基底部とほぼ一致していたものと想定して大過なかろう。なお梅原末治氏の報告の外形現状図によると、この石室の平面的位置は後円部の中心に玄室を配しているようにみられる。この時期の比較的大規模な前方後円墳としては異例であるが、後述するように、この古墳の造営時期がやや降ると想定されることと関係するのかもしれない。

この古墳にともなう遺物は知られていないが、その横穴式石室は、さきにふれた最終末段階のいくつかの前方後円墳にみられる横穴式石室よりやや新しい様相を示している。きわめて巨大な石材を用いているため、

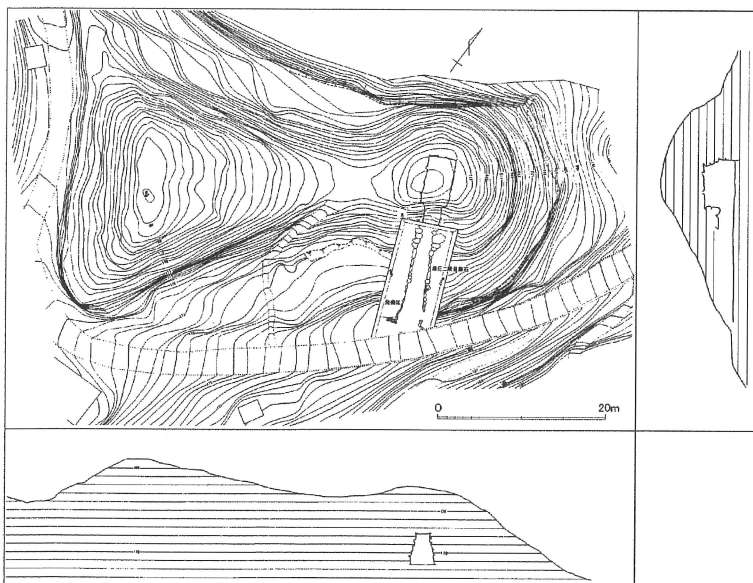


図 5 奈良県葛城市平林古墳墳丘測量図（『平林古墳』による）

畿内の一般の大型横穴式石室の型式変遷観をそのまま適用するのは困難であるが、玄室や羨道の壁面構成は石舞台式に近い面も見受けられる。石材の質によるものかもしれないが、まだ切り石技法が用いられていないことや羨道側壁の最奥部のみが一段の巨石を立てて構成されていることなどから、ここでは天王山式並行と考えるべき。したがって、畿内における前方後円墳の終末段階の平林式より少し遅れ、7 世紀初頭頃に降る可能性が大きい、ここでは 6 世紀末葉の諸例と一括しておく。墳

丘基底部に石室床面を置く、この時期の前方後円墳の一例である。

このように一部 MT85 型式時から TK43 型式時の多くの前方後円墳では、横穴式石室の位置が墳丘の基底面に構築される例が圧倒的に多くなるようである。前節で述べたように MT85 型式時には、物集女車塚古墳例のようにまだ石室が 2 段築成の墳丘の第 1 段の比較的高い位置にその床面を置くものもあるが、二塚古墳の後円部石室のように 2 段築成の古墳の基底にその床面を営むものが出現するのである。しかし二塚古墳ではその前方部の石室が第 1 段の上面近くにその基底を置いて営まれていたことも事実であり、まさにこの MT15 型式時が、前方後円墳の横穴式石室の立面的位置が墳丘内のやや高い位置から墳丘基底部に営まれるようになる転換期にほかならなかったことを示すものであろう。そして TK43 型式時には、前方後円墳における横穴式石室の位置は、ほとんど墳丘基底部にその床面を置くようになるのである。

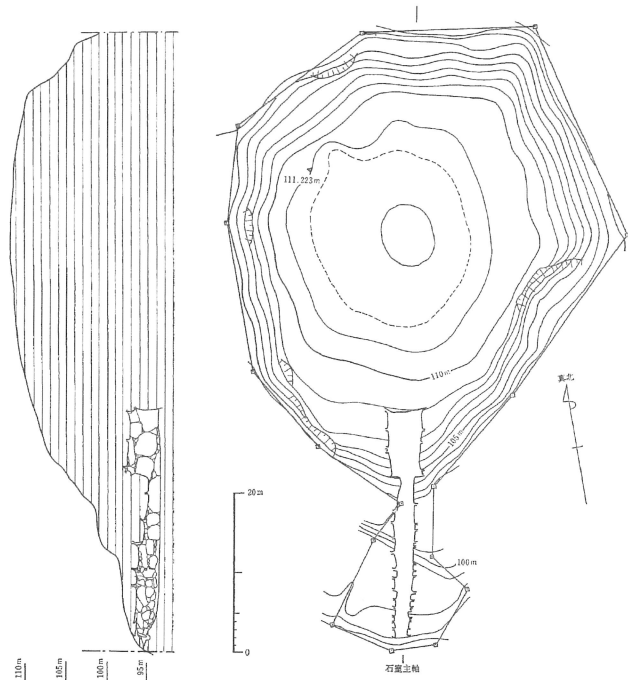


図 6 奈良県橿原市五条野丸山古墳の墳丘側面図と後円部における横穴式石室の位置（『書陵部紀要』第 45 号による）

ただ、後期前方後円墳として最大の規模をもつ奈良県橿原市五条野丸山古墳（畝傍陵墓参考地）の横穴式石室は、宮内庁書陵部陵墓調査室が 1992 年に実施された石室内現状調査の結果、TK43 型式時のものであることがほぼ確実となったが、その石室の位置は墳丘基底部より相当高い位置に営まれている。まず造営時期については、その横穴式石室がきわめて巨大なものであり、この前後の大型横穴式石室の型式編年観をそのまま適用することは困難である。しかしかって指摘したように、まだ使用石材に切り石技法が用いられていないこと、さらに玄門部の構造などからも筆者のいう平林式の横穴式石室の範疇に含まれるものと考えられる〔白石、1999〕。また玄室内の二つの家形石棺の型式もまた奥棺、前棺ともに TK43 型式時のものと考えられ〔白石、2009〕、さらに現状調査の際に石室内で TK43 型式の須恵器片が採集されていることから、この時期の構築と考えて矛盾しない。

この横穴式石室は、前方部を北北西方に配した前方後円墳の後円部にあり、石室はほぼ南に羨道部を向けている。墳丘における横穴式石室の位置は、1992 年の陵墓調査室の調査により、平面的にはその奥壁の位置は後円部の中心よりおよそ 23 ㍍ほど南にあり、さらに立面的には現在の玄室床面は標高 94 ㍍前後、おそらく本来の床面は 93 ㍍付近にあることが明らかにされた（図 6）〔福尾・徳田、1994〕。現在の墳頂部はおよそ標高 112 ㍍前後であるから、本来の石室床面は現墳頂より約 19 ㍍も低いところにある。後円部の南側の周濠部分の現標高は奈良文化財研究所作成の 1,000 分の 1 地形図の読図によると約 88 ㍍であるから、後円部はほぼ 24 ㍍の高さをもつことになり、さらに石室の床面は後円部の基底部から 5 ㍍ほど上に位置することになる。

墳丘は大きく改変を受けており、本来の段築の状況を正確に復元するのは難しい。明治初期にこの古墳を調査したゴーランドは、全体として 2 段に重ねられた前方後円形の墳丘の後円上部に 3 段目の円丘を載せた形を想定し、その第 1 段上に横穴式石室が営まれたものとして復元図を作成している（図 7）〔Gowland, W. 1897〕。ゴーランドのこの復元図は、横穴式石室を後円部の真横に開口しているものと誤解しているが、この点だけを修正するとその復元はほぼ当を得ているものと考えてよいのではなかろうか。五条野丸山古墳は、その横穴式石室の基底を、3 段築成の後円部の第 1 段上に置いているものと考えられるのであ

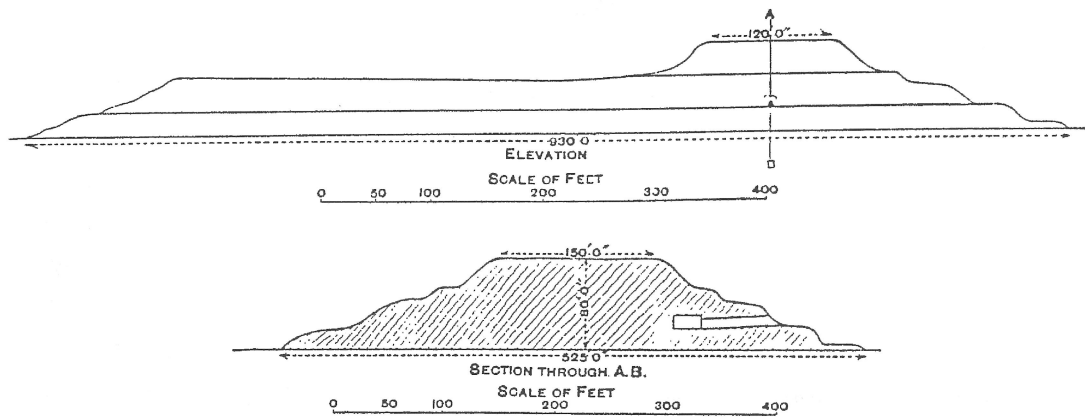


図7 ゴーランドが想定した五条野丸山古墳の墳丘側面図と後円部の断面図 (Gowland, 1897による)

る。なお五条野丸山古墳では横穴式石室の平面的な位置が、玄室の奥壁の位置を墳丘中央に置くという原則と大きく乖離するが、これは墳丘があまりにも巨大で、石室の位置を第2段の墳丘端に近付けなければ墳丘斜面に開口できなかつたからであろう。

五条野丸山古墳ほど大規模なものではないが、奈良県天理市ウワナリ塚古墳もまた6世紀後半以降に降ると考えられる古墳で、後円部の基底よりは明らかに高い位置に横穴式石室を営んだ例に挙げることができるものである。前方部を北に向けた前方後円墳で、伊達宗泰氏はこの古墳を2段築成とし、墳丘長を110mとしておられる〔伊達、1976a〕。この天理市石上付近の石上古墳群には東からウワナリ塚古墳、石上大塚古墳、別所大塚古墳の3基の墳丘長100mを超える後期としてはきわめて大規模な前方後円墳が営まれている。それらのうち、石上大塚古墳、別所大塚古墳がいずれも2段築成と考えられるところから、ウワナリ塚古墳もまた2段築成と考えてよからう。

ウワナリ塚古墳では、北に前方部を配した前方後円墳の後円部に、前方部とは反対方向の南に羨道部に向けた横穴式石室がある。古墳の造営時期については、横穴式石室の玄室の側壁が基本的には4段積みで、さらに玄門部の両側が1段の石材によって構成され、前方後円墳の造営停止後の型式である天王山式と共通する要素も認められる。このことから横穴式石室の型式でいえば前方後円墳に採用される最後の型式である平林式並行、須恵器の型式でいえばTK43型式時のものと考えておきたい。石室はその奥壁をほぼ後円部の中央に置いているようである。またその立面的な位置については、現地での観察からは明らかに第1段上にその床面を置くものと判断される。この古墳の前方部前面には幅の広いテラスをもつ段の存在が認められ、伊達宗泰氏は前方部の両側にまで及んでいた可能性も考えておられる。ただ地形的に後円部にまで及んでいたとは考え難いので、墳丘とは切り離して台状部にとらえる伊達氏の見解にしたがっておきたい。



図8 奈良県橿原市五条野丸山古墳の墳丘(奈良国立文化財研究所作成の1/1,000地形図による)

なお、この古墳の西側に並列して営まれている石上大塚古墳でも、後円部で大規模な横穴式石室が検出されている。ウワナリ塚古墳と近い時期で、ほぼ同じ規模の2段築成の大型前方後円墳であり、おそらく同じように後円部の第1段上に石室が営まれているものと推測されるが、報告されている限り

では検討の材料がない〔伊達、1976b〕。なお造営時期についても、その後円部で調査された右片袖式の石室は奥壁が4段積みであり、3段積みで石材もより大型化しているウワナリ塚古墳例よりも古いものと考えたいが、ウワナリ塚では確認されている埴輪が、一部墳丘の発掘調査が実施されているにもかかわらずまったく検出されていない。両者の前後関係についてはさらに検討が必要である。

6世紀でもその後半以降のことのほぼ確実な五条野丸山古墳とウワナリ塚古墳では、それぞれの後円部にある横穴式石室が墳丘の基底部ではなくその第1段上に営まれている。この点、さきに検討したこの時期の中型の前方後円墳では横穴式石室がその床面を墳丘基底部に置いていたのと相違する。これは、五条野丸山古墳やウワナリ塚古墳のような大規模な前方後円墳では、その第1段が地山により形成されていて、充分石室の重量を支えることができるからであろう。五条野丸山古墳ではその後円部の周濠の周囲に旧地形の丘陵を利用した大規模な外堤があるが、その上面は墳丘のほぼ第1段の高さと等しく、後円部の墳丘第1段もまた地山を削りだしたものであることは疑いないと思われる（図8）。

いずれにしても6世紀後半になると、それ以前のように埋葬施設の位置を墳丘の比較的高い位置に置かなければならないという前期古墳以来の伝統的な意識はなくなるようである。そして石室の安定性を最大限考慮して、中型・小型の古墳では石室の床面を墳丘の基底に置くようになり、大型古墳では地山を整形した第1段上に石室を営む例も現れるのである。

4. 終末期における横穴式石室の位置

畿内では、須恵器のTK43型式時、すなわち6世紀の第4四半期までは、奈良県の例では平林古墳、珠城山3号墳、鳥土塚古墳など前方後円墳が盛んに造営されていた。ところがTK209型式の古い段階、すなわち7世紀初頭になると、奈良県広陵町牧野古墳や同桜井市天王山古墳のような大型の横穴式石室を持つ古墳も、前者は円墳、後者は方墳というように前方後円墳ではなくなる。このように畿内では6世紀末葉を境に基本的には前方後円墳の造営は停止され、それまで前方後円墳を造営していた支配者層も、大型の円墳や方墳を営むようになったと考えられる。最近では、この前方後円墳の造営は停止されたが、なお古墳の造営が続く時代を古墳時代終末期と把握している〔白石、2005〕。本節では、この段階の大型古墳の墳丘における横穴式石室の位置について瞥見しておこう。

終末期でも最も初期のTK209型式の古い段階、横穴式石室の型式でいえば天王山式〔白石、1999〕の段階の大型古墳としては、さきにあげたように円墳としては牧野古墳、方墳としては天王山古墳がある。このうち牧野古墳は、1983～84年に実施された石室内の発掘調査により、羨道部からTK209型式の古段階の須恵器が出土している〔河上、1987〕。この古墳は丘陵の先端部を利用して造られた古墳で、背後の部分の整形は省略されている（図9上）。その南半部の墳丘端は径60mの円弧を描くので、一応径60mで3段の円墳を意図して造営されたものと考えているが、墳丘の発

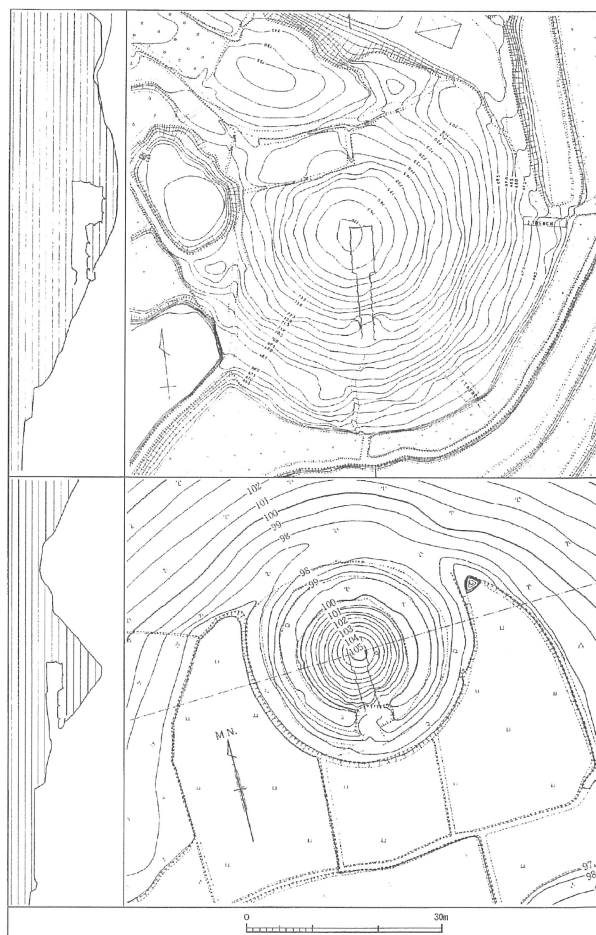


図9 終末期の円墳における横穴式石室の位置（上：奈良県広陵町牧野古墳、下：奈良県天理市峯塚古墳）

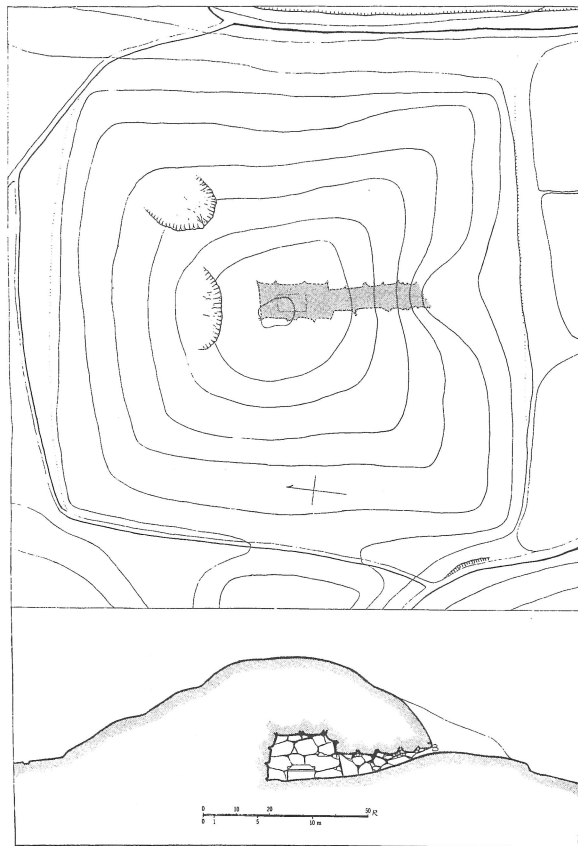


図10 奈良県桜井市赤坂天王山古墳の墳丘図(『近畿地方古墳墓の調査』3による)

掘調査が行われていないので必ずしも確実とはいえない。径60 cm とした場合、第1段が約3 m 、第2段が約4 m 、第3段が5 m の高さを持つことになり、第2段の高さがやや高くなりすぎ、問題が残る。横穴式石室の平面的な位置は、玄室の奥壁を円形の墳丘のほぼ中心に置いている。立面的にみると、石室の床面はほぼ標高70 cm で、68 cm 前後と考えられる第1段の上面より相当高い位置にくる(図9上)。地形的にも第2段中に地山を掘削した堅固な掘り方を営むことができたために、通例よりは高い位置にその床面を置いているのであろうか。

牧野古墳とほぼ同時期の大型方墳に天王山古墳がある。この古墳は一辺45～47 m 程度の方墳で、やや高い第1段の上にほぼ同じ高さの第2、第3段を重ねた3段築成の古墳と考えられている〔梅原、1938b〕。石室は梅原末治氏の報告にも明確に示されているように、平面的には玄室が墳丘のほぼ中央に、立面的にはその床面がほぼ墳丘第1段の基底にくる(図10)。この点、牧野古墳とは異なり、第3節でみた6世紀後半の中型の前方後円墳の諸例と共通する。第1段の下半部の地山を穿った掘り方内に石室基底を置いて造営されて

いることは疑いなかろう。

大阪府河南町金山古墳は、日本にはほとんど類例をみない大型の本格的な双円墳である。南側のやや大きな円丘と北側のやや小さな円丘を接続したもので、墳丘長は86 m を測る。北丘には玄室と羨道にそれぞれ家形石棺を納めた横穴式石室があることは早くから知られていた〔小林・榎崎、1953〕が、その後の調査で南丘にも横穴式石室があることが明らかにされた〔赤井、1994〕。ただ南丘の石室の内部は未調査である。この古墳の造営時期については、北丘の石室の玄室の家形石棺の型式が牧野古墳や天王山古墳の家形石棺にきわめて近いもので、北丘の石室の造営時期が、須恵器でいえばTK209型式の古い段階、すなわち7世紀初頭頃であることは確実と思われる。横穴式石室の型式も天王山式であり、これと矛盾しない。未調査の南丘の石室の時期は不明であるから、古墳それ自体の造営時期がこれより遡る可能性は否定できない。ただ埴輪の使用はもう認められず、また南丘の横穴式石室の入口部の構造は北丘の石室のそれと共通しており、あまり離れた年代を想定する必要はなさそうである。

この古墳の墳丘については、1992年に実施された調査の結果、南丘は3段、北丘は2段に築成されていたことが明らかにされている。また北丘の横穴式石室はその玄室の奥壁の位置を北丘のほぼ中央に置いており、立面的にはその床面が周濠底部よりやや高い墳丘基底にくることは明らかである。双円墳というきわめて特異な墳丘形式を採用しているものであるが、その石室の位置をこの前後の時期の多くの古墳と共通にしていることが知られるのである。

次に、7世紀の第2四半期、横穴式石室の型式でいえば石舞台式の段階の諸例をみてみよう。まず方墳の例で奈良県明日香村石舞台古墳の場合は、墳丘についてはその基底しか遺存していなかったため、その上部の形状は不明である。京都大学の報告書では、上円下方墳であった可能性が大きいと推測されていた〔濱田、1937〕。しかし、第2次世界大戦後の調査・研究の進展の結果からも、上円下方墳は畿内では奈良市・京都

府木津川市の石のカラト古墳例のように8世紀初頭の、終末期で最も新しい段階にしかみられないものであり、石舞台古墳については方墳と想定すべきであろう。その段築については、この時期の畿内の比較的大型の古墳がいずれも3段築成であるところから3段であったと考えておきたい。

横穴式石室の位置については、平面的には明らかに玄室の位置が方形の墳丘の中央に来るように設定されている。また立面的にはその床面をほぼ墳丘の基底部、周濠の底部よりわずかに高い所に置いていたことが明らかにされている。報告書にはこの古墳の旧地形について「北から南にかけ、また東から西にかけ、現在見るより以上の少々急なる傾斜地であり、赤黒色の土壌を戴いた砂利層がその地山であったと思われる。それに僅かばかりの地ならしをなし、少々平坦な台地を作り、其の上に穴を穿って羨道玄室最下列の石を樹て、然る後追々と其の上に石を積んだものであろう」と記されている。基盤に掘り込まれた掘り方内に石室の下方が営まれていることは疑いないが、横穴式石室の基底を墳丘の第1段の基底、すなわち周濠の底部よりやや高いところに設定していることが注目される。

石舞台古墳とほぼ同時期的大型円墳として奈良県天理市塚穴山古墳がある。底部の幅9.5mの周濠(空堀)と幅14.9mの外堤を廻せた大規模なものであるが、墳丘の西半部が大きく改変されていて、墳丘の本来の大きさは正確にはわからない。墳丘の中心に横穴式石室の玄室が置かれていたとすれば、径63.4mになるという〔竹谷、1990〕が、玄室の奥壁の位置を墳丘の中心に置いていたとすればさらに大きくなる。したがって墳丘における石室の平面的な位置については、墳丘中心に玄室を配しているのか、あるいは奥壁の位置を置いているのかは明らかにしえない。一方立面的には、現地での観察によると石室の床面は外堤の上面とほぼ同じ高さのように判断される。おそらく、地山を削りだしたやや低い第1段上に載っているのであろう。したがってこの古墳の場合も、石舞台古墳の場合と同様、石室の基底は墳丘のほぼ基底近くに置かれていたことになる。

考古学的に正確な造営年代は決定できないが、やはり石舞台古墳に近い時期の古墳と想定されるものに、大阪府太子町の山田高塚古墳(推古天皇陵)がある。この古墳は東西約60m、南北約56mのやや東西に長い平面をもち、明らかに3段に築成された方墳である。陵墓調査室の墳丘調査の結果によると、第3段目の墳丘南斜面の下方に、墳丘の南北中軸線の東側と西側にそれぞれ、横穴式石室の羨道部の最前方の天井石と考えられる大きな石材が露出して、東西に2基の横穴式石室が並列して営まれていたらしいことが報告されている〔福尾、1990〕。この想定はおそらく正しいものと思われ、この古墳の東西の横穴式石室はいずれも第1段の上面にその床面を置いていたものと想定される。墳丘の基底に床面を置く石舞台古墳や塚穴山古墳とは異なるが、これは山田高塚古墳が、7世紀の第2四半期でもやや新しい時期に降ることを物語るものであろうか。

石舞台式の次に位置づけられる横穴式石室の型式は岩屋山式やその亜式である。筆者はそれらの実年代を7世紀の中葉から第3四半期と考えている。この型式の石室の代表例である奈良県明日香村の岩屋山古墳は、一辺約47mほどの方形壇の上に八角形の墳丘を載せた八角墳と想定される〔白石、1982〕。横穴式石室の位置は、平面的には明らかに墳丘の中心に玄室の奥壁がくるように企画されている。また立面的には、石室の床面が下段の方形壇上のテラス面ないしこれより僅かに低い位置にあるように観察される。

内部の横穴式石室が岩屋山式であることが知られている大阪府太子町叡福寺古墳(聖徳太子墓)は、最近の陵墓調査室の測量調査により、墳丘の背後では第1段、第2段の造成は省略されてはいるが、東西径53m前後の3段築成の円墳であることが明らかにされている〔福尾・清喜・加藤、2008〕。さらにこの調査によって墳丘における横穴式石室の正確な位置も明らかにされた。それによると石室は、ほぼ墳丘の中心に玄室の奥壁を置いており、立面的には羨道部末端の床面の標高が72mで、墳丘第1段上のテラス面の高さとも一致する。したがって石室が墳丘の第1段上に営まれていることは確実である。それは陵墓調査室の調査結果の公表以前に筆者が想定していたところとほぼ同じ結論である〔白石、2008〕。

やはり岩屋山式の横穴式石室をもつ古墳で、その墳丘の測量調査が行われているものに奈良県天理市峯塚古墳がある。丘陵の南斜面の麓に営まれた径35mの3段築成の円墳で、各段の墳丘斜面には石が葺かれて

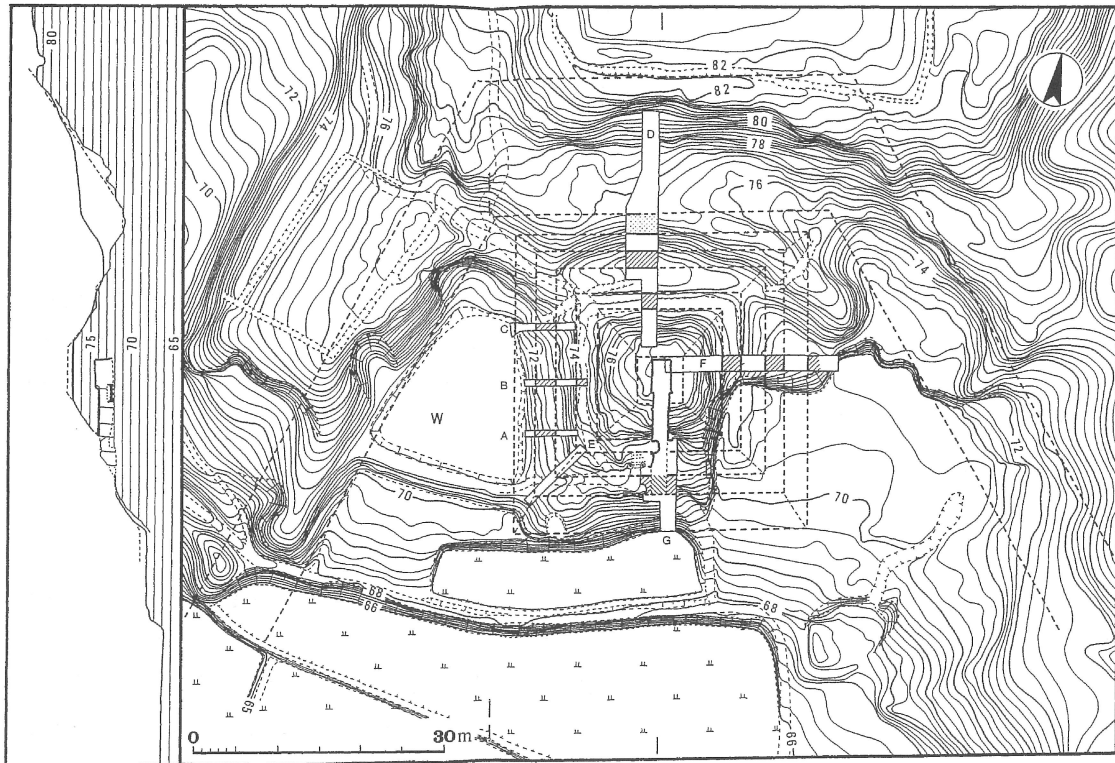


図11 奈良県平群町西宮古墳墳丘図(『西宮古墳発掘調査概報』による)

いる。特に3段目の斜面には凝灰岩質砂岩の切石が用いられていて、全体として墳丘の遺存度がきわめて良好である〔山内ほか、1992〕(図9下)。墳頂部の平坦面が認められなくなっている点も特異で、截頭円錐形を呈していた日本列島の円墳の最終的な形態ともいえようか。横穴式石室は平面的には玄室を墳丘のほぼ中央に置き、立面的には墳丘のほぼ第1段上に構築されていることが測量図からも読み取れる。石室の墳丘内における立面的な位置は、叡福寺古墳の場合とまったく同じである。

峯塚古墳は円墳であるが、これとほぼ同規模で方墳の形態を採用した古墳で岩屋山亜式の石室をもつものに、奈良県平群町の西宮古墳がある。この古墳も丘陵の南斜面に営まれた一辺36mの3段築成の方墳で、各段とも斜面には扁平な石を貼り、各段上の平坦面にも河原石を敷きつめていたことが発掘調査により明らかにされている。また背後の丘陵から墳丘を画するために南に大きく開く平面台形の掘割りが墳丘の両側から背後に営まれていた。この古墳で興味深いのは、墳丘の形態と内部の埋葬施設である横穴式石室の構造が統一的・一体的に企画されていることが明らかにされたことであろう〔村社、1995〕。

この古墳の横穴式石室は、平面的には玄室が墳丘の中央に位置し、立面的には石室の基底面が第1段上にある。そして羨道入口の天井石は斜めに切られているが、この面はそのまま墳丘第3段南側の斜面に続き、また羨道両側壁の南端部は墳丘第2段南側の斜面と揃うように斜めに切られているのである(図11)。こうした墳丘と石室入口部の関係は、同じように羨道入口の天井石の前面が斜めに切られている他の岩屋山式や岩屋山亜式の横穴式石室を持つ古墳の場合も同様であろう。ここに日本の古墳に横穴式石室が採用されて以降の墳丘と石室のあり方の長い変遷過程の到達点をうかがうことができるのである。なお西宮古墳の年代は、石室前面の墓道で出土した須恵器が奈良文化財研究所の飛鳥編年で「飛鳥Ⅱ」と呼ばれる時期でも新しい段階のものであり、近江遷都に近い660年代の終り頃のものと考えられる〔白石、2000〕。

むすび

以上4節にわたって、畿内地域の比較的大規模な古墳の墳丘における横穴式石室の位置が、5世紀から7世紀にかけてどのように変遷したのかをあとづけてみた。あらためて繰り返すことはしないが、小山のよう

に大きな墳丘の頂上部に埋葬を行う竪穴系の埋葬施設が一般的であった日本の古墳の墳丘構造とは必ずしもなじまない横穴式石室を採用するには、少くない問題があったことは疑いない。受容期から展開期前半の6世紀中葉以前の段階には、埋葬施設を墳丘の高いところに営むという前期古墳以来の伝統は容易に否定できなかったようで、横穴式石室もまた墳頂部近く、あるいは2段築成の墳丘の第1段上に営まれた。墳丘の上半部は多くの場合盛り土によって形成されているから、そこに大きな石材を用いた重量のかかる大きな構造物を作るには多くの困難が伴った。このために考案されたのが、比較的大きな石材を用いた基礎地形の採用である。

さらにこの大きな矛盾を解消するため、石室は次第に墳丘の比較的低いところに営まれるようになり、地山に穿たれた掘り方内にその下部を収めることが一般的となっていった。石室の基底が墳丘の基壇である第1段より低い場合は、羨道に段差や傾斜をつけるなどして石室の床面を第1段のテラスと接続させるための工夫を凝らした。

一方、古墳における横穴式石室の平面的な位置については、畿内でも初期の段階では、方墳の例ではあるが塔塚古墳に代表されるように、竪穴系埋葬施設の場合と同じように墳頂平坦面の中央、すなわち墳丘の中心部に墓室の中心である玄室を置くものがほとんどであった。ところが6世紀初頭になると市尾墓山古墳のように、石室の奥壁の位置を墳丘の中央に置く例が出現する。これは横穴式石室が畿内の支配者層の大型前方後円墳に採用されるようになり、羨道とその前の墓道に傾斜をつけて墳頂部に至るような変則的なものではなく、墳丘側面に開口部を設ける本格的な横穴系墓室を志向するには、大型古墳では墓室、すなわち玄室の位置を墳丘（多くは後円部）の中央から少しでも墳丘側面に近づけることが必要であったからであろう。ただその場合も古墳の中心的な埋葬施設は墳丘中央部に営まれなければならないという前期古墳以来の伝統的な考え方があり、両者の妥協の産物が、墓室（玄室）それ自体ではなくその奥壁を墳丘の中心に置くことになったのであろう。いずれにしても、これが大型古墳に横穴式石室を採用する際の、平面的位置決定の原則となっていくのである。

かつて小林行雄氏は、大阪府羽曳野市の白髪山古墳（清寧天皇陵）やボケ山古墳（仁賢天皇陵）のような後円部径に対し前方部幅が著しく広がった前方後円墳の出現について「横穴式石室の採用によって、石室の入口を側面に開き、しかも奥室を墳丘の中央部に位置させようという願望が」後円部の縮小を招いたとする仮説を提起しておられた〔小林、1951〕。さきの石室奥壁を墳丘の中心におく原則の成立の経緯からも、この仮説は今も一部の前方後円墳については成立しうるものと思われる。もちろん白髪山古墳やボケ山古墳が横穴式石室を採用しているかどうかは今の時点では不明であるが、第2節で検討したように、その可能性は少なくないと考えている。

展開期でも後半の6世紀後半になると、横穴式石室の石材の大型化がさらに著しくなる。それとともに次第に埋葬施設は墳丘の高所に営まなければならないという意識は薄れていったようで、石室の基底を墳丘の基底とそろえる例がむしろ一般的になるのである。また一部の大型前方後円墳などでは、墳丘の第1段を地山の削り出しで形成し、墳丘の第1段上に横穴式石室の基底を載せるものもみられるようになった。ただこうした例は、この段階では一部の大型前方後円墳でみられるにすぎず、前方後円墳の造営が停止されて以降の終末期になっても7世紀前半の段階では、石室の床面を墳丘の基底部に置いたものが少なくない。ようやく7世紀の中葉すぎになってこうした墳丘の第1段上に石室の床面を置く例が、大型古墳では一般化する。また墳丘の小規模化の結果でもあるが、墳丘の中心に石室の奥壁の位置を合わせるというやや変則的なあり方から脱し、墳丘の中央に玄室を置いて墳丘と石室の中心をそろえ、古墳の中核的な埋葬施設としての本来的なあり方に回帰する例も次第に多くなっていくのである。

まさに長い試行錯誤の期間を経て、古墳造営の終末段階でもある7世紀後半の岩屋山式ないし岩屋山垂式の横穴式石室の時期になって、人びとは墳丘構造と埋葬施設としての横穴式石室の位置を構造的・一体的に企画し造営するようになる。日本の古墳の墳丘構造とは必ずしもなじまなかった横穴式石室のあり方を、長い年月をかけて前方後円墳やその他の墳丘構造に整合するよう改善を重ねた最終的な姿を、われわれはよう

やく中央集権的な古代国家の成立前夜にあたる7世紀後半の古墳に見出すのである。

きわめて不十分な考察で意を尽くせていないが、与えられた紙数も尽きたのでとりあえず擱筆する。最近では、前方後円墳など古墳の墳丘形態の研究、あるいはその埋葬施設である横穴式石室の形態研究はきわめて精緻になってきている。そのこと自体は喜ばしいことであるが、さらにそれぞれの研究を前進させるには、両者の相関関係を総合的に考察する視点が不可欠であろう。例えば横穴式石室の形態の変遷にも墳丘のあり方との関係が決して無視できない。これは逆に前方後円墳の形態変化についても指摘できよう。小論がこうした点に研究者の関心を喚起するのに少しでも役立てば幸いである⁽⁶⁾。

【付記】

早くから関心を持ちながら検討の機会を逸してきた古墳の墳丘における横穴式石室の位置の変遷過程について、考察の契機と機会を与えていただいた福尾正彦氏をはじめとする書陵部陵墓課の方々に感謝の意を表したい。とりわけ不完全な原稿の整理・編集でご面倒をおかけした清喜裕二氏に厚くお礼申し上げます。また付図の作成を援助された大阪府立近つ飛鳥博物館の小栗梓さんにも感謝したい。

註

- (1) 古墳時代前期初頭に成立するいわゆる「竪穴式石室」は、墓壙内に棺を収めた後、これを保護ないし封じ込めるために四方に石積み製の壁を構築して上に天井石を架し、さらにその上部を粘土などで被覆して埋めてしまうものである。結果として石室が形成されることになるが、あらかじめ石の部屋を営んでここに納棺するものではない。このため「室」よりは棺を保護するものとしての「槨」の語を用いるのが適当であるところから、最近では「竪穴式石槨」の用語を用いる研究者も多い〔和田、1989ほか〕。ただ「竪穴式石室」の中には中期におそらく朝鮮半島の影響を受けて出現したと思われる、あらかじめ竪穴式の石室を営み、その後に棺を収めるものも存在する。用語の変更には、まずそれらの諸類型の整理が不可欠であり、それらすべてを一括して「竪穴式石槨」と呼び換えるのは適当とはいえない。ここでは従来の用語法に問題があることを承知の上で「竪穴式石室」の語を用いておく。
- (2) 墳丘における横穴式石室の位置に関する問題を取り上げた先行研究としては、青木敬氏の「古墳における墳丘と石室の相関性」がある〔青木、2007〕。各地の後期・終末期古墳における墳丘と横穴式石室の位置の相関性を検討された力作である。ただそこでは墳丘における石室の位置のあり方を、墳丘優先型、石室優先型、折衷型という墳丘と石室のいずれを重視したかという造営者の意識を想定した3類型に分類されるが、石室の位置のみからこうした識別が可能かどうかについては疑問も少なくない。小論はむしろそうした評価や分析の前提となるべき、墳丘における石室の位置の時期的な変遷過程の実態をまず整理しようとするものである。
- (3) 横穴式石室の右壁・左壁、右片袖式・左片袖式などという場合、ここでは石室の入り口から奥に向かって右・左の意味で使用している。筆者も以前は石室それ自体の立場に立って、奥から入り口に向かって右・左の意味で使用していたが、石室の複雑な構造や壁画を説明する場合それでは混乱するため、すべて「向かって」の意味で使用するように改めている。
- (4) このような奥壁部から石室の背後にも通路が存在する例は、奈良県明日香村真弓鑑子古墳例などのように玄室の前後双方に羨道を持つ例を別にすると、他には知られていないようである。ただこの市尾墓山古墳に近い時期の刳抜式冢形石棺を納めた石室をもつ奈良県天理市東乗鞍古墳、同御所市権現堂古墳でも、ともに玄室の奥壁部分が損壊していることが注意される。市尾墓山古墳例と同じような施設の存在が、奥壁の構造を弱くしたものかも知れない。
- (5) この時期の須恵器の暦年代については、MT15型式が490～520年前後、TK43型式が570～600年前後、その間にTK10型式とMT85型式が入るものと考えている。すなわち、各型式の存続期間を等間隔とするのではなく、出土例の多いMT15型式やTK43型式の年代幅を少し長く想定している。MT15型式が一部5世紀に遡ることについては、奈良県香芝市下田東2号墳の周溝内でTK23型式の須恵器と共存した木棺材のコウヤマキの遺存最終年輪の年

代が 449 年であり、測定者の光谷拓実氏によって 450 ～ 460 年頃の伐採と想定されている。このことから、TK23、TK47 の年代が従来の想定よりやや遡ることからも疑いないものと考えている。なお MT85 型式については、最近では TK10 型式新相（新段階）とする研究者もおられる。MT85 型式の設定については問題があることは確かであるが、田辺昭三氏が報告されている TK10 号窯の資料と TK43 号窯の資料の間には明らかに TK10 型式とは異なる 1 型式が存在することは疑いない。以前に執筆したものととの整合性を考えて、ここでは MT85 型式の型式名を使用しておく。一部の研究者が使う TK10 型式新相と変わりはない。

- (6) この小論をまとめる過程で大変気になったことは、古墳の発掘調査報告や測量報告をみても、墳丘における横穴式石室の位置、特にその立面的な位置を正確に把握できないものが少なからずみられたことである。石室の立面的な位置のわかる墳丘断面図を欠いた報告も少なくない。たとえ断面図がなくても、それを読者が検討し作図できるデータが示されていればよいのであるが、それすら記載されていないもの、また石室の実測図に水準線やその標高が示されておらず、石室の高さが全くわからないものもある。こうした不備な報告がむしろ最近のものに多いことが気になる。明治初期に日本の古墳を、大阪造幣寮の仕事の余暇を利用して調査した英国人 W. ゴーランドが作成した明解な図面類と比較すると、日本の最近の研究者が如何に古墳の構造的把握に無関心であるかを示しているように思えてならない。もちろん最近の報告にも優れたものも少なくないが、一方でこうした問題があることを指摘しておきたい。

《引用・参考文献》

- 青木 敬 2007 年「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』23 号 日本考古学協会
- 赤井毅彦 1994 年『史跡 金山古墳発掘調査概要』河南町教育委員会
- 秋山浩三・中山章編 1988 年『物集女車塚』向日市教育委員会
- 一瀬和夫 2008 年「古市・百舌鳥古墳群の主要古墳の概要—古市古墳群—」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成 17～19 年度科学研究費補助金研究成果報告書、奈良大学
- 一瀬和夫・十河良和・河内一浩 2008 年「古市・百舌鳥古墳群の埴輪」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成 17～19 年度科学研究費補助金研究成果報告書、奈良大学
- 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一 1962 年『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第 21 冊、奈良県教育委員会
- 上田舒・森浩一・北野耕平・秋山進午・宇田川誠一 1960 年『富木車塚古墳』大阪市立美術館
- 梅原末治 1938 年 a「備中千足の装飾古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3、日本古文化研究所
- 梅原末治 1938 年 b「大和赤坂天王山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3、日本古文化研究所
- 梅原末治 1938 年 c「山城太秦巨石古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3、日本古文化研究所
- 大塚初重 1977 年「大阪府芝山古墳出土遺物をめぐる諸問題」『考古学論集』広島大学
- 笠野 毅 1990 年「身狭桃花鳥坂上陵整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第 41 号、宮内庁書陵部
- 河上邦彦 1984 年『市尾墓山古墳』高取町教育委員会
- 河上邦彦 1987 年『史跡 牧野古墳』広陵町教育委員会
- 京都大学考古学研究会 1971 年『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会
- 宮内庁書陵部陵墓課編 1999 年『宮内庁書陵部陵墓地形図集成』学生社
- 木場幸弘 2001 年「市尾宮塚古墳」『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所
- 小林行雄 1951 年『日本考古学概説』東京創元社
- 小林行雄・植崎彰一 1953 年『金山古墳および大藪古墳の調査』大阪府文化財調査報告書』第 2 輯、大阪府教育委員会
- 白石太一郎 1982 年「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 1 集、国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1999 年「終末期横穴式石室の型式編年と暦年代」『考古学雑誌』第 85 卷 1 号、日本考古学会
- 白石太一郎 2000 年「西宮古墳の語るもの」『古墳の語る古代史』岩波現代文庫

- 白石太一郎 2005年「古墳の終末と古代国家」『古代を考える・終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 白石太一郎 2008年「叡福寺古墳の再検討」『橿原考古学研究所論集』第15、八木書店
- 白石太一郎 2009年「五条野丸山古墳の被葬者をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』12 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 末永雅雄 1961年『日本の古墳』朝日新聞社
- 杉本宏・荒川史・福島孝行 1992年『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告書』宇治市教育委員会
- 十河良和 2008年「古市・百舌鳥古墳群の埴輪―堺市の調査による出土資料―」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17～19年度科学研究費補助金研究成果報告書、奈良大学
- 平良泰久・久保哲正・奥村清一郎 1986年『日本の古代遺跡』京都I、保育社
- 高取町教育委員会 2004年『国指定史跡市尾宮塚古墳現地説明会資料』
- 高槻市教育委員会 2007年『史跡今城塚古墳の第10次調査（現地説明会資料）』
- 竹谷俊夫 1990年「塚穴山古墳発掘中間報告」『天理参考館報』第3号、天理大学出版部
- 伊達宗泰 1960年「珠城山古墳」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集、奈良県教育委員会
- 伊達宗泰 1976年a「ウワナリ塚古墳」『天理市石上・豊田古墳群』II、奈良県文化財調査報告書 第27集、奈良県教育委員会
- 伊達宗泰 1976年b「石上大塚古墳」『天理市石上・豊田古墳群』II、奈良県文化財調査報告書 第27冊、奈良県教育委員会
- 伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則 1972年「烏土塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第27冊、奈良県教育委員会
- 西谷 正 1965年『藤森・蕃上山古墳の調査』大阪府水道部
- 野上丈助 1967年『河内の古墳』古美術鑑賞社
- 羽曳野市教育委員会編 2002年『史跡古市古墳群峰ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市教育委員会
- 濱田耕作 1937年『大和島庄石舞台の巨石古墳』京都帝国大学文学部考古学研究报告 第14冊、京都帝国大学文学部
- 坂 靖 1994年『平林古墳』當麻町教育委員会
- 福尾正彦 1990年「推古天皇陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号、宮内庁書陵部
- 福尾正彦・清喜裕二・加藤一郎 2008年「聖徳太子 磯長墓の墳丘・境界石および御霊屋内調査報告」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部
- 福尾正彦・徳田誠志 1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号、宮内庁書陵部
- 福永伸哉・寺前直人編 2007年『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究报告 第4冊
- 宮原晋一 1988年「市尾墓山古墳の再検討」『橿原考古学研究所論集』第9、吉川弘文館
- 村社仁史 1995年『西宮古墳発掘調査概報』平群町教育委員会
- 森 浩一 1978年「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第1巻
- 森 浩一・田中英夫 1960年「大阪府堺市塔塚調査報告―畿内の古式横穴式石室に関連して―」『日本考古学協会第25回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 安村俊史・桑野一幸 1996年『高井田山古墳』柏原市教育委員会
- 山内紀嗣ほか 1992年『奈良県天理市峯塚古墳・西乗鞍古墳・罐子塚古墳測量調査報告』天理大学歴史研究会
- 吉澤則男 2002年「横穴式石室の存否について」『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市教育委員会
- 和田晴吾 1989年「葬制の変遷」都出比呂志編『古墳時代の王と民衆』古代史復元6、講談社
- Gowland, W. 1897. Dolmens and Burial Mounds in Japan. Archaeologia Vol.5